

担当常任理事 理事会理事	委員会名	委員長 ・支部長	平成26/27年度 課題と抱負	平成26年度総括	平成27年度総括
深山	倫理委員会	伏木 信次	厚生労働省等にて、ヒト由来試料の取扱いなどについてのガイドラインが検討される状況を注視しつつ、病理検体の研究使用にかかわる倫理問題を、日本病理学会として再検討する。		
	COI委員会	伊藤 雅文	医学研究におけるCOIガイドラインに沿った、病理学会としてのCOIマネージメントを実行する。理事、各委員会委員長、倫理委員会、COI委員会委員は年度ごとのCOI申告書を提出し、COI委員会に諮る。総会および秋期特別総会のすべての演題にCOI状態について提示する。		
	リスクマネジメント委員会	黒田 誠	病理診断は、最終診断であるので患者さんの治療方針の決定、その予後について大きな影響を及ぼすことになる。また、病理解剖をさせていただいた場合にご遺族の納得が得られない場合も出てくる。医療機関と患者さんおよびご遺族の間で解決できなかった事例が、この委員会にあがってくる。コメントで対応させていただく場合が大部分であり、この解決にどこまで介入するかは慎重に判断して進めてきている。今後も国民から信頼の得られることができる内容で対応していきたい。当然のことであるが倫理委員会とは連絡を密にしていける必要があり、連携して進めていく所存である。		
	学術評議員資格審査委員会	岡田 保典	学術評議員内規に基づいて、申請者の資格審査を行う。年会費が一般会員と同額になったことから申請者数が増加しており、資格条件の見直しや更新手続きの設定などが今後必要になると思われる。		
	功労会員資格審査委員会	岡田 保典	功労会員内規に基づいて、学術評議員25年以上の有資格者の審査を行うとともに、学術評議員25年に満たない申請者についても審査する。後者に関しては、学術評議員23-24年あたりを目標とし、日本病理学会への貢献度をもとに審査しており、今後大きな混乱は生じないと考えている。		
	デジタル病理学検討委員会	佐々木 毅	1. 今後のデジタル病理学の方向性を検討し、「行動指針2014」などに提言する。 2. 転送画像による「病理診断」に関して、「ルール作り」の検討を既にある研究会の助言も参考に検討する。 3. 社会保険委員会とも連携し、「転送画像」による病理診断に対する「保険診療上の規制緩和」を平成28年診療報酬改定時に要する。		
	生涯教育委員会(支部学術委員会を含む)	森谷 卓也	病理診断講習会・コンパニオンミーティング・病理診断シリーズ・診断病理サマーフェスト、支部での講習会や講演など、生涯教育に関わるプログラムを集約し、会員にわかりやすく配信するシステムを構築する。専門医制度の変革も意識し、学会や各支部が提供する種々の生涯学習プログラムの情報交換や調整を行う場としても活用する。講習に用いられたコンテンツの二次利用について検討を進める。		
	病理診断講習会委員会	中村 直哉	これまで行われてきた複数年にわたる講習会内容の策定、オリジナルカラーテキストの作成と配布を平成27、28年度に行う講習会でも継続したい。診断講習会は病理専門医試験対策のみならず、病理専門医の生涯教育においても有効な方策である。今後講習会で紹介される症例のほか、これまで紹介された症例も可能な限りざかのぼって、代表的なHEスライドをパワーポイントに取り込み、ホームページにアップしていきたい。		
診療関連死調査に関する委員会	黒田 誠	医療関連死に対する医療界の取り組みが始まって既に10年が経過している。モデル事業を通して、病理学会は国民に解剖の重要性と立ち位置を明らかにし、啓発活動を継続して実施してきた。新年度は国会でこの内容が審議され、法制化されて、来年の10月から新しい形で医療界をあげてスタートすることになる。病理学会は日本医療安全調査機構の中軸として活動しているが新しい形への移行期となるこの2年間はモデル事業の実施地域を核として学会としてのコンセンサスをしっかりと取って対応していく所存である。			
小田	企画委員会	小田 義直	ここ数年で病理学会会員数は増加傾向にあり、これを堅持してゆく。女性病理医の割合も増加傾向にあり、若手女性医師の積極的なリクルートと働きやすい環境作りを進めてゆく。新たな専門医認定機構であるべき専門医像として「リサーチマインドを持った専門医」というコンセプトが想定されており、診断・研究のバランスのとれた病理医の育成を行う。そのために関連委員会である将来構想検討委員会、病理医・研究医のリクルートと育成委員会、男女共同参画委員会との密接な連携を取ってゆく。社会への情報発信委員会およびサマーフェスト委員会との連携により病理学会および病理医の活動を一般市民や他の診療科の臨床医により広くアピールしてゆく。がん診断体制委員会との連携により今後複雑化し増大してゆくであろうがんの病理診断体制に柔軟に対応してゆく。画像ネットワーク管理運営委員会を通じて病理情報ネットワークセンターの有効かつ積極的な利用を目指す。		
	癌取扱い規約委員会	落合 淳志	現在各学会で作成されている癌取扱い規約の統一化を目指し、次回の改訂に合わせて、記載順、用語の統一などを図る。また、日本癌治療学会における癌取扱い規約の統一化を目指した活動にも横断的な学会として参加する。病理診断ガイドラインの作成を目指す。		
	将来構想検討委員会	佐々木 毅	1. 「行動指針2013年」に続く「行動指針2014」の作成を支援する。 2. 社会保険委員会と連携し、「1人病理医支援」「女性病理医支援」について規制緩和をもとめる。具体的には、平成28年診療報酬改定で「病理診断管理加算」の要件緩和を働きかける。 3. 「精度管理NPO法人」や「NPO法人：がんの早期発見・治療に必要な病理診断の総量を向上させる会」などを会員に周知し、活動を支援する 4. 病理学研究分野における将来構想を、関連学会とともに考え、学会員に提案する。		
	病理診断体制作業部会	佐々木 毅	昨年の委員会での検討事項を含め、病理診断体制の望ましい形態に関して検討し、「行動指針2014」に提言する。		
	病理医・研究医の育成とリクルート委員会	豊國 伸哉	主な活動は東京レジンナビ参加、病理学研究新人賞の選出業務ですが、委員は各地区を代表しており、病理学の未来を担う人材の発掘に知恵をしばりあっています。ひとりでも多くの医学生・研修医に一生の仕事としての病理学に興味を持ってもらえるように頑張ります。		
	男女共同参画委員会	羽場 礼次	女性病理医や一人病理医などの勤務、学会参加など働きやすい環境整備について方策を検討する。		
	診断病理サマーフェスト委員会	羽賀 博典	診断病理サマーフェストは「病理と臨床の対話」のコンセプトの下、臨床医と合同で行う臓器別講習会として、病理医・臨床医の双方から多くの参加者を得てきた。これまで東京と京都で隔年開催してきたが、講師・参加希望者の増加に伴い支出の増加、運営スタッフの確保と負担の軽減が問題となりつつある。適正な規模での運営を図る必要がある。		
	広報委員会	高橋 雅英	病理学会の活動、病理診断、病理医の役割について市民の理解を促進する活動を立案する。日本病理学会のウェブサイトの適切な管理・運営、改善を行う。会員のUMIN-IDの利用の向上、各種講習会の受講登録のオンライン化の促進、Pathology Internationalのオンライン閲覧の利便性の向上などに引き続き取り組む。		
社会への情報発信委員会	伊藤 智雄	現在の病理医不足、社会における認知不十分を解決するため、有効な情報発信は極めて重要な事項である。現在、ウェブサイトおよびパンフレットなどによる情報発信が行われているが、これにさらに魅力的なコンテンツを加えてゆく必要がある。現在、他学会のウェブサイトやパンフレットなどの情報収集を行い、新たなウェブサイトコンテンツ、パンフレットを提案できるよう検討を進めており、平成26年度春の病理学会総会にあわせて開催される委員会では案を決定し、公開を実現したい。			
病理情報ネットワーク管理運営	宇於崎 宏	病理情報ネットワークセンターの会員の活発な利用を促進する。 【具体的課題】利用目的の制限が無いことを周知する。一方で、投稿された文書、症例の公開範囲を限定することも可能であるので、利用をコンテンツホルダーに働きかける。			
安井	学術委員会	安井 弥	宿題報告、A演説をはじめ多くの重要な選考を通して、診断病理と実験病理のバランスのとれた病理学の方向性を明らかにする必要がある。学術集の充実、他領域・他学会との連携、研究推進委員会や編集委員会との協働は重要である。当面の課題として、学術評議員の申請資格、任期、評価について検討する予定である。		
	学術奨励賞選考委員会	笠原 正典	病理学の未来を担う若手人材に対する賞であり、その意義は大きい。「病理学の基礎的研究あるいは診断業務の中で特に優れた学術的貢献」を公正・厳格に評価し、適切に運用することにより、病理学の進歩と病理学会の発展に貢献したい。		
	研究推進委員会	福本 学	病理認定・専門医制度が発足してから35年が経過し、診断精度の向上や分類の共有などは確立されてきました。その間にトランスレーショナル研究は長足の進歩を遂げ、分子診断や分子標的薬の開発は着実なものとなりつつあります。このような状況で臨床医の付託に答えられる病理診断を下すために、最先端の知識を修得する必要があります。一方、病理外来も胎動し、一般の人達に最先端の医学知識を正確に伝える必要も課せられています。診断ばかりでなく、予後や治療までを語るためには、今何が明らかとなっているか、今後何を明らかにして行く必要があるかを知るばかりでなく、症例の中から問題意識を育んだ病理医が先進的に疾患単位を解明する可能性も極めて大きいものがあります。このように、病理が直面するあらゆる場面に対応できるような知識と思考法を病理関係者が容易に身に付けられるよう支援することが本委員会の使命と考えます。		
	編集委員会	白石 泰三	編集委員会固有の課題としては、マスコミ等学会外からの病理画像の使用要請に対する許諾基準を検討し、その頻度を高め、病理に対する国民の認知度を高めていきたい。傘下の委員会の懸案事項で長期的視野で解決すべき事項がいくつかあり、その解決に向けて共働して取り組みたい。		
	PI刊行委員会	坂元 亨宇	新規企画の導入を機動的に行うことを可能とするために、副編集長の選出など編集体制を強化する。雑誌のさらなる発展、国際化を目指す。学術評議員の責務として、PINへの投稿の呼びかけを強化する。		
	PI常任刊行委員会	坂元 亨宇			
	剖検情報委員会	宇於崎 宏	日本病理剖検報第55巻の刊行、56・57巻の作成を行う。また、編集体制の見直し、合理化を進める。オンライン登録や過去の剖検報の電子化、ICD-11への対応について検討する。 【課題】近い将来に出版、印刷所を変更することへの対応。入力システムの安定運用のための検討。		
	診断病理編集	安田 政実	現在、診断病理編集委員会は編集長を含めた5名で構成している(一昨までは4名であった)。診断病理への投稿数は微増で大きな変化はないが、編集業務量の軽減と質の向上を計るにも、編集委員の増員(まずは6名)を叶えたい。また、現行の紙ベースの投稿・査読体制から電子投稿システムへ転換することで、「投稿規定に準拠しているかのチェック」、「郵便などによる配送の省略・迅速化」、「査読および再投稿作業の簡略化」など、幾多のadvantageが得られるものと期待される。今年度中に立案、稼働に向けた準備を推し進めていきたい。		

担当常任理事 理事会理事	委員会名	委員長・支部長	平成26/27年度 課題と抱負	平成26年度総括	平成27年度総括
坂元	財務委員会	坂元 亨亨	学会の財務状況の健全化と効率化に引き続き務める。収支決算、事業計画案および予算案を適切に作成するように努める。		
	教育委員会	笹野 公伸	現在本邦の医学卒前教育はCBT、OSCE等を経て現在国際基準に基づく医学教育分野別認証制度に沿った教育カリキュラム制定に向けて大きな転換期を迎えようとしている。このような大きな流れの中で医学教育における病理学の位置づけをどのようにしていくのかという事は病理学会にとっても大きな問題になる。又病理診断科が標榜科になる事に伴い、医学部高学年のBST教育における病理学の位置づけ等についても医学部卒業生のリクルート等にも関連して病理学会としても積極的に取り組んでいく課題ではないかと考えられる。又今迄継続してきた夏の学校や学術集会における学生のポスター発表を更に積極的に進めていき、一人でも多くの学生が将来の進路として病理学を選択の一つに出来るように全力で取り組んでいく所存である。		
	国際交流委員会	八尾 隆史	これまで行ってきた英国、ドイツとの交流の継続に加え、アジア諸国との交流にも力をいれたい。とくに若手が海外で活躍できるような場を作れるようにしたい。その他、テレカンファレンスやバーチャルスライドの活用による国際交流も検討したい。		
黒田	病理専門医制度運営委員会	黒田 誠	専門医制度についての大きな方針が決まりつつある。学会認定の専門医は第三機関が認定するシステムに合わせて2015年卒業の医師から初期臨床研修2年を経た後に、基本的診療18科で歩調を合わせて後期研修を実施して、国民にわかりやすい専門医制度を確立していくことが求められている。病理学会は質の高い実施試験を行い国民が信頼できる病理専門医を輩出してきた。第三者機関がこれを認定する新しい方式になっても現在の研修システムを更にバージョンアップしながら国民の期待にお応えできるシステムの構築に全力で対応していく所存である。		
	試験委員会	安田 政実	従来の試験委員会は、「実施委員会によって作成された試験問題のbrush-upと試験当日の面接」の2つの活動に従事することが実質的な役割であった。今年度より、試験委員会の活動方針として、「試験体制の整備・充実を命題とし、短期的および長期的課題に取り組んでいく」ことをあげたい。その第一歩として、総会・秋大会時の委員会開催を常態化し、建設的な意見交換の場とする。まずは、広島での開催を試みる。		
	試験実施委員会	非公開	掲載なし		
	専門医資格審査委員会	北川 昌伸	専門医資格取得のための資格審査を公正、公平、かつ迅速に行うために、できるだけ普遍的かつ簡潔な関連要項や規定作りを心掛ける。また、専門医資格更新についても、日本専門医認定機構の指針に則った規則作りを進めるとともに、理事の先生方や会員の皆様の納得のいく形で円滑に更新業務を遂行することを目指したい。		
	施設審査委員会	清水 道生	病理解剖数が減少する傾向にあるが、認定施設および登録施設は今後も若い病理医の育成には必須であり、その認識の啓発に努めることが大切である。しかしながら、今後は専門医制度の変更が予定されており、日本病理学会でこれまで設定していた認定施設A、Bの名称や基準などの見直しを検討する必要がある。		
	部会報編集委員会	村田 哲也	部会報は例年通り「診断病理」に合わせて4回/年の発行を維持し、内容は基本的にこれまでと同様とする。毎号の特集については4月の委員会で決定する。支部学術活動の電子化はエクセルファイルのデータベースが作成できたので、今年度から本格運用を開始する。さらに、このデータを学会HPの「病理情報ネットワークセンター」で開示する方向を考慮しており、病理情報ネットワーク管理運営委員会(宇崎崎宏委員長)と連絡をとる予定である。専門医研修カリキュラム作製に向けて、研修モデルプログラムの策定、病理専門医研修手帳の修正と整備、病理解剖を含めた専門医資格取得に必要な研修内容の吟味、病理専門医研修基幹病院と連携病院の選定方法、研修プログラムの評価システム(外部委員を含めた)とフィードバックシステムの構築の必要性、病理学会カードシステム導入の是非などについて議論を進め、理想的なカリキュラムを提案できるよう努力する。		
	「専門医認定第三者機関」 専立に向けた病理学会準備 ワーキンググループ	北川 昌伸・清水 道生			
	医療業務委員会	森井 英一	病理業務を行っている会員の支援を中心とした活動で、担当分野が多岐にわたるが、コンサルテーション、社会保険、剖検・病理技術、精度管理を担当する委員会と協議しながら問題解決を計り、また必要に応じて他の学会や団体と折衝を行うことで、会員への支援を行いたい。		
	コンサルテーション委員会	松野 吉宏	学会が提供するコンサルテーション・サービスのあり方を検討する一方、会員への利便性や回答の的確性を確保できるよう日々の円滑な運営を継続する。昨年度着手できなかった、学会HPの当該部分改修を実現する。それに合わせて、国内のコンサルテーション・サービスに関する情報ポータルサイトの立ち上げを試みる。		
	社会保険委員会	黒田 一	日本病理学会として国民の医療を良くするにはどのようにすべきかを中心軸に据えていきます。その基盤をなす診療報酬に関して、中長期的展望に立ち、関係各方面と密に連絡して運営したいと思っています。これまでこの委員会のメンバーは多くのことを成し遂げてきましたので、全員再任していただきました。委員会のメンバーと共によりよい日本の医療のため、努力してまいります。		
	剖検・病理技術委員会	柳井 広之	病理解剖数の減少に伴い一人の病理医が経験できる剖検数は減少している。そのため、一例の病理解剖から得られる事柄を多くの病理医が学習、共有できる方策を探りたい。また、特殊な状況における病理解剖に関する情報を提供できる仕組みを考えていきたい。		
	精度管理委員会	増田しのぶ	精度管理委員会は、病理診断の質を保障する仕組みを考案する役割を担っている。本年度、従来の外部精度管理システムモデル検討が、発展的に特定非営利活動法人 日本精度保証機構として活動を開始することから、同活動が円滑に進むよう情報共有ならびに協力的支援を継続する。また、病理学会会員との双方向性の情報提供の仕組みを考案し、急速に変化する情勢に対応した病理診断精度向上を目指す。		
	口腔病理専門医制度運営委員会	豊澤 悟	口腔病理専門医制度と口腔病理診断業務の社会的認知度をさらに高め、学会や地域連携による教育環境を充実させて、質の高い口腔病理医が輩出されるよう努力したい。		
	口腔試験委員会	原田 博史	試験問題のプール制を導入して、隣接する頭頸部病変を含めた良質の試験問題を選択し、質の高い口腔病理医が輩出されるよう努力する。試験実施に当たってはよりスムーズな対応や進行ができるよう実施委員との連携を密にし、準備を進める。」		
	口腔試験実施委員会	非公開	掲載なし		
	口腔資格審査	前田 初彦	口腔病理専門医資格取得のための資格審査を公正、公平、かつ迅速に行うことに努力したい。また、口腔病理専門医資格更新についても、円滑に更新業務を遂行することを目指したい。さらに、これらを行うために簡潔で普遍的な要項や規程を作成することを心がけたい。		
	支部委員会	野島 孝之	支部は北海道、東北、関東、中部、近畿、中国四国、九州の7地域からなり、日本病理学会の基盤をなしています。病理診断医と実験病理研究者の育成、生涯教育を重点として活動を行っています。支部委員会は各支部間の情報交換の場として、それぞれの活動の報告、問題点の討議を行い、より良い支部活動を目的としています。		
	北海道支部	笠原 正典	北海道病理談話会(北海道医学大会病理分科会)、標本交見会、病理夏の学校を核に、北海道支部における学術活動の活性化、診断能力の向上、若手人材のリクルートを図っていききたい。		
	東北支部	長沼 廣	病院病理医の立場で東北支部のお世話をすることになりました。大学と病院との連携を密にして、少ない病理医が生き生きと仕事ができるような環境作りを皆で考えます。活気ある支部総会を運営します。学生をリクルートするためにも若手病理医のモチベーションや診断力アップに取り組みます。病理夏の学校を見直してみます。また、基礎研究離れが進む中、若手病理医の研究発表も支部会総会に積極的に取り入れていきます。		
	関東支部	内藤 善哉	日本病理学会の支部会の中で、最も大きな規模の関東支部会の活動の活性化や支部のあり方自体、種々の意味で日本病理学会に及ぼす影響は多大なものと考えられる。そのような支部活動の中で、若手病理医の育成を目指した学部学生や研修医への積極的な働きかけ、支部学術集会での参加を促す方策や女性病理医への支援をさらに進めてゆき、日本病理学会全体の活性化に運動した支部活動を展開してゆきたい。		
中部支部	野島 孝之	平成24年4月から第2期目として、支部を担当する事になりました。年2回の交見会、1回のスライドセミナー、夏の学校を開催しています。また、支部内のコンサルテーションシステムを起動して20年以上になります。支部会員数は600名を超え、精力的に活動しています。支部会員の皆様と共に努力していく所存です。なにとぞ宜しくお願い申し上げます。			
近畿支部	大澤 政彦	会員の情報交換の場の一つである、学術集会をさらに充実したものにしていきたい。そのため、その内容等についての検討が今後の課題である。また、若手病理医ののリクルートや育成についてもさらに取り組んでいきたい。「夏の学校」の内容も含め、検討を行いたい			
中国四国支部	森谷 卓也	年3回のスライドカンファレンスを継続し、バーチャルスライドの利用法、過去の演題のコンテンツ化についても検討する。病理夏の学校や、病理医への道(HP)をさらに充実させ、学生や研修医に病理の魅力や伝えるよう引き続き努力する。取扱い規約や保険診療などに関する業務関係の講習会を適宜実施する。			
九州沖縄支部	横山 繁生	H24-25年の任期中、新規事業として若手病理医ののためのティーチング・ファイル(TF)作製とそのヴァーチャルスライド化、「若手病理医の会」発足があった。H26-27年度の新規事業計画は未だありませんが、例年通り年6回のスラコン、年1回の病理集談会、年2回の学術講演。支部活動は順調で、前述のTF、「若手病理医の会」企画の講演会、軌道に乗ってきた病理学校等の継続・充実にも努めたいと考えています。			